

さて、何を描きますか。

画家
大久保宏美

季節の変わり目、もう随分と着ていないTシャツ群が次から次へと箆笥の奥から現われる。お出掛けにTシャツ一枚で許されイイ気になっていたのは、まだもう少し若かったからだ。これらは作業着に降格させるとして、ちよつと着てみては振り返る。

絵描きを職業としている身、巷では大抵「先生」と呼ばれる。買い物 が て ら フ ラ ッ と 立 ち 寄 っ た 画 廊 で、パ リ ッ と ス ー ツ を 着 こ な す 著 名 な 方 に 紹 介 さ れ る。「こ ち ら 大 久 保 先 生 で す。」「ど う も。」(あ、熊の柄のTシャツで来ちゃった。)ニヤついていいる平素も、こういう場合はさらに丁寧な微笑み会釈する。別に熊に罪は無い。しかし正装相手に熊Tは無い。そこはかとなく漂うのんびり感が、完全に舐めている。そんなことが立て続けに何度もあった。何度もあるほど何パターンもの熊の柄のTシャツを保有していた自分にもビックリだ。

横浜の中でも永年住んでいるからこそ許され言える片田舎感を残す町に生まれ育ち、今

おおくぼ・ひろみ

画家。横浜市戸塚区出身。武蔵野美術短大油絵専攻修了。在学中より個展グループ展にて作品を発表。独立美術協会、神奈川県女流美術家協会、日本美術家連盟所属。10月18日より六本木s+arts (スプラスアーツ)にて個展開催予定。



も住むこの場所は、国道と貨物線と河川に囲まれた所謂中小工業地帯で、人工物の狭間に残された自然を見つけては、工夫して遊ぶ幼少期だった。培った独自の創造性と独特のユルさが、大人になってからの仕事に活かされているのか、と良い方向に顧みる。

大学在学中から現在もなお、抽象画を描いている。何かを見て描くわけではなく、具体物に頼らず有機的に線を走らせる。若い時は解ってたまるかと虚勢を張り、時が経つにつれ解ってほしいと人に寄り添い、解ってもら

わなくちゃと少しの努力をし、今では解ってもらわなくても良いか、と思っている。そんな話をしながら交わす言葉の端々に、この人は判ってくれている、という手掛りを見つけ確認し合う、僅かなコミュニケーションが日々の行いを豊かにする。さらに筆を進めると、記憶の彼方から蓄積されたものが現われる。何かに見えてきても、今はそれを止めることはしない。たとえそれが熊の絵になったとしても。いや、それはどうだろう(笑)。制作の格闘は続く。